

きさによって決まるのではなく、ひずみ履歴にも依存していることが導かれた。

(4)本解析法は、実際のマルチブラケットシステムなど、

さらに複雑な梁構造の曲げ解析にも応用することが可能であることから、矯正装置の力系を定量的に把握するのに役立つものと考えられた。

15. HAコーティングインプラント3 5年の臨床成績

丸山ゆみ子, 田村 誠, 垣野 健
加藤千佳子, 田西 和伸, 山田 雄
舞田 健夫, 田中 收
(医科歯科クリニック)

骨組織と直接結合する骨内インプラントは欧米で高い評価を受け、国内においても近年この臨床応用が盛んになってきた。今回我々は、チタンにハイドロキシアパタイトをプラズマコーティングしたインプラント〈Integral〉の3 5年に及ぶ臨床成績を調査し検討した。

平成7年1月末迄に68人の部分欠損患者に対し、316本のインプラントを埋入した。患者は男性が29人で埋入数159本、女性が39人で157本、年齢は23歳から67歳までに分布し、40歳代が最も多く、埋入部位は男女共に全体の約70%が下顎臼歯部であった。インプラントの幅径はφ4 mmが186本、φ3 25mmは130本であり、長径は10mmが最も多く、次いで13mm、8 mmであった。

臨床経過は、316本の埋入手術に対しこれまでに撤去されたインプラントは4本で成功率は上顎で95 7%、下顎

で100%、全体で98 7%であった。補綴処置は200本のインプラントに対し行われ成功率は99 0%であった。撤去された4本のうち2本は埋入手術直後にインプラントが安定しなかった症例であり、補綴後の2本は天然歯と連結した症例であった。

補綴処置後6ヵ月毎に撮影したパノラマX線写真にて骨レベルを計測した結果、下顎臼歯部では経時的にわずかな吸収を認め、上顎臼歯部では経時的変動が大きい傾向もみられたが、全体的に骨吸収は少なかった。

インプラントは欠損症例において極めて有効な治療法であり、従来の床義歯に比べて咀嚼機能の回復も著しく患者の満足度も高い。今後は更に症例を増やし経過観察を続けインプラントの臨床的評価を行っていく予定である。

16. コンテンズの差異が陶材のデンチン層の色調に与える影響 第2報

堀内 光一¹⁾, 広瀬由紀人¹⁾, 坂口 邦彦¹⁾
越智 守生¹⁾, 白井 伸一¹⁾, 八島 明弘¹⁾
宮内 桂治¹⁾, 松本 弘幸¹⁾, 加々見寛行¹⁾
井上龍一郎¹⁾, 田中 隆²⁾
(歯科補綴学第二¹⁾, 附属病院技工部²⁾)

【目的】本実験は可及的に臨床に即した実験方法によりデンチン陶材築盛時のコンデンスの方法・条件が異なった場合に、デンチン陶材の色調がどのように影響されるのかを、測色学的に検討した。

【材料と方法】実験材料は、陶材溶着用金合金のカメオゴールド、金属溶着用陶材はユニボンドウィンテージ(オペーク陶材：P A₂O、デンチン陶材：A₂B)を用いた。測色用陶材試料はティギヤシグ、焼成スケジュールなどの条件は全て同一条件で作製した。試料はオペーク陶材の厚径0 3mm、デンチン陶材の厚径を0 8mmに規定し、

デンチン陶材築盛時のコンデンス方法のみが異なるものとした。すなわち試料は初心者から熟練者までが、各個人の手慣れた技法でコンデンスを行った。試料の削色にはCM2002分光測色計を使用した。実験はオペーク陶材焼成後の試料の色差がほとんど認められない22試料を選択、それらにデンチン陶材を築盛焼成し、オペーク陶材試料の測色範囲と対応する部分の削定を5回行った。その後試料を切断し、光学顕微鏡で観察、断面部の気孔率は画像解析装置を応用して計測し、算出した。透過率は、埋設材の型にデンチン陶材を築盛後ポーセレン専用パイ